

2026年9月27日 教会音楽月間①

説教題『語り合い、ほめ歌え』エフェソ信徒への手紙 5：6～20

主任牧師 加藤 誠

「むしろ、霊に満たされ、詩編と賛歌と霊的な歌によって語り合い、主に向かって心からほめ歌いなさい。」(エフェソ5章18～19節)

今日から四週にわたって「教会音楽月間」として、大井教会に与えられている教会音楽の働き、礼拝での賛美の恵みについて、聖書に聴いていきます。今朝は今回の教会音楽月間のテーマ聖句であるエフェソ 5 章 19 節を中心に学んでいきましょう。

教会の礼拝で歌う歌を「賛美歌」といいますが、ほかの歌と何が違うのでしょうか。賛美歌は「神を賛美する歌、ほめたたえる歌」です。「ほめたたえる」「賛美する」というヘブライ語はいくつかあり、例えば「ヤーダー」（神に向かって両手をあげ、賛美、感謝、証しをささげる）、「ハーラル」（神への賛美を爆発的に輝かせる）、という言葉と並んで「バーラク」（神の前に静まり、ひざまづく）という言葉もあります。つまり「神を賛美する」とは「力を尽くして神を大きくする」と同時に「神の前に自分を小さくする」こと。賛美歌を歌うことで、自分中心の思い、不安や焦り、ため息などが小さくされて、神からいただく恵み、喜び、安らぎ、希望が心にあふれていく。そして、私たちの歩みが神に向かうものとされる。それが賛美歌なのです。

そもそも人はどうして歌うようになったのか。『人間はなぜ歌うのか』（ジョーゼフ・ジョルダーニア著）によると実にたくさんの学説があるようです。例えば、かつてサバンナで一番弱い生物だったホモサピエンスが生き残れたのは「歌を威嚇の道具にしたから」という仮説があります。歌と踊りは最弱のホモサピエンスを集団的トランス状態に導き、集団として最大の力を発揮させる力を持ったのだというのです。なるほど歌は集団の力を高めます。かつて日本では軍歌が人々の心を戦争に駆り立てていきました。秋田のプロバスケットチームは試合前にサポーターと選手が一緒に秋田の県民歌を歌います。そうやって闘志がかき立てられていくわけです。

教会の礼拝でもみんなで歌うことで霊的な高まりに導かれますが、しかし主イエスの歩みを見ると、先ほどのヘブライ語「バーラク」のように、神の前に静まる賛美を大切にされました。主イエスは会堂長ヤイロの娘が死んだ時、笛を吹き鳴らし泣き叫ぶ人々を外に追い出し、部屋の中で静かに祈られています。また主イエスは最後の晩餐の後、弟子たちと賛美を歌いながらオリーブ山に向かわれましたが、それは弟子たちを集団的トランス状態に高めて闘いに備えるためではありません。神の御心に集中していくための静かな賛美でした。私たちの心に自分の思い、感情があふれる時に、神の御心に集中し、御心に従う信仰を励ますために賛美歌は与えられているのです。

また「賛美」について、詩編 102 編 19 節は「主を賛美するために民は創造された」と語っています。私たち人間は神を賛美するために創造された。神を賛美して生きることが神の御心であり、わたしが賛美して歩む時、わたしは神から与えられた命を本来の目的にもっともふさわしく生きているということでしょう。

創世記で人は土のチリで形づくられ、主なる神が命の息を吹き入れられて生きる者になったと書かれています。私たちは神の息を必要とするのです。神の息なしには生きていけない。神の息とは神の霊のこと。神の霊の息吹なしに私たちは生きられない。これが聖書の信仰です。私たちが賛美歌を歌うときに心も体も高められるのは、私たちを愛をこめて生きる者としてくださった神の霊の力が注がれるからです。

今朝の聖書エフェソの信徒への手紙 5 章 6 節以下は「光の子として生きる」という小見出しがついています。暗闇の中に歩んでいた私たちは、主イエスに結ばれて光の子とされました。光の子とはキリストによって「起こされ、立ち上がらせられ、照らされた者」（14 節）のこと。私たち自身は闇を抱えているけれど、主イエスに起こされ、立ち上がらせられ、照らされて、私たちは光の子として歩む者とされるのです。

光の子はどのように歩むのか。「時をよく用いて、何が主に喜ばれ、何が主の御心であるかを知れ。酒に酔いしれるな。霊に満たされて歩みなさい」（16～18 節）とパウロは勧めています。「酒の酔い」はアルコールで理性が鈍くされ、不安が小さくされる一方、本能や感情が活性化されて解放感を感じる状態です。それに対して「霊の力」は私たちを十字架の主の愛につなげます。十字架の後、人々を恐れて暗い部屋の中に閉じこもっていた弟子たちに聖霊が注がれると、弟子たちは扉を開けて人々の間に出かけていく者とされました。「霊の力」は不安と恐れでいっぱいになっている心を主の慈しみの光で照らし、神の慈しみと優しさと勇気で満たします。そして、間違いだらけの世界の中で、神の正しさと神の御心に生きる力を私たちに注いでいきます。

18 節「霊に満たされ、詩編と賛歌、霊的な歌によって語り合い、主に向かって心からほめ歌いなさい」。この「詩編」は旧約聖書の詩編のこと。旧約のイスラエルの民も新約のクリスチャンたちも、礼拝の中で詩編をよく賛美したようです。また「賛歌」は新約の教会で生まれたキリストをほめたたえる賛美歌で、例えばフィリピ 2:6 以下の「キリスト賛歌」が有名です。三つ目の「霊的な歌」のことは正確には分らないのですが、聖霊の働きによって生まれた、神の恵みや慈しみをほめたたえる賛美歌のようです。ただここで「心から主をほめ歌う」前に「語り合いなさい」と勧められているのはどういうことでしょうか。例えばパウロの第一コリント 14 章が参考になると思います。パウロは、騒々しく異言を語り、自分の賜物を誇示するような礼拝ではなく、むしろ、お互いが神から与えられた言葉に聴き合う礼拝を目指すように勧めています。自分はこんなふうに祈れるし賛美できると、自分の賜物を誇る礼拝ではなく、教会がキリストの体として建て上げられるために、「一人ひとりが預言できるように祈り、皆が共に学び、皆が共に励まされる礼拝」を目指す。自分一人の心が高揚する礼拝ではなく、みんながキリストの体として建てられていく礼拝を目指す。これは教会の礼拝にとってとても大切なことではないでしょうか。

神の恵みを大いに賛美していきたいのです。同時に、神の前に静まり祈り、神の御心に集中すること、お互いの言葉を聴き合う交わりを大切にしたいのです。そしてこの世界のただ中で、教会として神の御心に従い、神の働きをほめたたえる賛美歌をみんなでささげていきたいのです。